

## 3502 地球のかおり 「カモメと少年」 状況と心模様①

念願のイベリア半島探訪が実現。聞き慣れないイベリア、国の名前だろうか。

古代の地名だろうか、最初はその程度の認識だった。

ポルトガルとスペイン。1543年、鉄砲伝来。

ありがたい語源は、ポルトガル語のオブリガード。

赤玉ポートワイン、という言葉も子供の頃、よく耳にした。

葡萄酒？ 親父殿のサイドボードに並べてあった。

ポルトガルのポルトと言う港町が、名前の由来だそう。

イギリスがフランスと喧嘩して、イギリスが、イベリア半島に持ち込んだとのこと。

ポルトガル情報は、子供の頃からインプットされていた。

日本からはるかに遠い国、地の果てポルトガル。直行便はなかった。

フランスの空港を経由してポルトガル・リスボンから、この旅が始まった。

北部に位置する、ポルトと言う港町は勿論、国境を越えて、

巡礼の道、サンティアゴ・コンポステラから、フランス・ピレネー山脈の麓のハカまで。

アルタミラの洞窟も観てみたい。南下すれば地中海。

アフリカ大陸が見えるジブラルタル海峡。この地に腰を下ろし、土を手にした。

ともかく、イベリア半島は、知れば知るほど興味がわく。

長期間の旅ではあるが、体験上、あっと時間が過ぎてしまう可能性がある。

機内では、地図を拡げ、夢も拡げ、想像、夢の時間だった。

ここでまた脱線、久楽流の情報収集の仕方がある。

最近は何己主義？ 礼儀作法やマナーが悪くなってきているので、

相手していただけるか、わからないが… うるさがられず、乗務員さんも

楽しい会話になればと、要領よく聞き出す方法、

こんなことを考えていると時間は過ぎる。秘策は別の機会に。

リスボン到着、英語の表示はあったが、公用語は、ポルトガル語。

世界で1億人がポルトガル語、代表は、ブラジル。きっと気疲れするだろう。

大変な旅になりそう。ボディランゲージ、これもまた楽しい。

まず、この国に慣れることが大切だろう。リスボン市内に数日滞在し、  
臨機応変に歩き回った。案内書や資料収集、本屋さんにも出向いた。  
日本食のレストランも探した。地図も購入。少し状況がわかると、マーケットも訪ねた。  
この国の人は、どんなものを食べているのか。自ら食し、自分の足で歩き体感。  
久楽流の市内散策をする。郊外にも足を伸ばした。  
結構足が疲れる。坂道も多い。言葉の問題、結構、気疲れもするものの体感が先。  
それから資料を見ることにしている。

ものに気づくのは、知識ではなく感性。先入観や固定概念は逆効果。  
日本で入手出来る資料を疑うわけではないが、あくまで、アバウト、おおざっぱ。  
自分で確かめるのが一番確かである。だから面白い旅ができたように思う。  
この国の感触としては、比較的安全そうなので助かる。郊外の状況も把握しておきたい。  
日本からは、ポルトガルは、地の果て。大西洋を観てみたかった。  
ひとり静かに、大西洋を眺めてみたかった。少しの間、詩人になりたかった。  
リスボンから比較的短距離のコスタ・ド・ソルに、ロカ岬、  
シントラにも足を伸ばした。

お国事情が何とか把握できたところで、気まぐれと直感で、  
地中海を見たいと南下を選択。東南先端のサンビセンテ岬を目指した。  
美味しいものを先に食べるか、後で食べるか、それが問題。  
異国である。食べてみないことにはわからないものがいっぱいある。  
直感、未知への挑戦が、体験上、面白い。この数日は気疲れし、身体も足も疲れている。  
この旅を最後まで楽しむには、少し体を休め、心と呼吸と身体を整えることも大切。

セトール湾のセトール海岸を通りかかった。  
断崖絶壁の光景ではない。砂浜がつづき、おだやかな景観。なぜか、落ち着き、  
心の安らぎを感じた。京都弁で、ほっこり。  
肩の力が抜けたような状態になった。大西洋が中心の世界地図、  
右端の小さな国、日本。日本からは地の果て、左端がイベリア半島。  
これから、2ヶ月の旅が始まる。よくこんな遠くまで来られたものだ。夢の夢が実現。  
大の大人とはいえ、言葉も不自由、ひとり旅。

当然、緊張感も気疲れもする。慣れるまでが大変なのは事実。

しかし、慣れないようにするのが久楽流。慣れるまでの未知との遭遇、初物。

どんな出会いがあるのだろうか。ドキドキ感、ワクワク感、これがなんとも楽しい。

男の夢とロマン、試練や苦難の連続だったが、この地で呼吸している私は、実に幸せな男。

今、人間、男冥利に尽きる。誰に感謝すればいいのだろう。

この海岸線は、海水浴場らしい。リゾート地なのだろう。リスボンから近い。

小さな宿だが、ポルトガルらしい宿が決まった。夕食には早い。海岸に出てみた。

人もまばらだった。しかし、人は見かける。

この海岸線は、どうもご近所の人の散歩コースらしい。

私も海岸に出て、軽い気持ちで散歩を始めた。別に被写体があるわけではない。

しかし、本能なのか、カメラ一台は携帯した。

長い海岸線を、いろいろ思いめぐらせながら歩いた。気候も、春から夏に向かう季節。

夕陽が美しい。大西洋は東、サンセットは西。

右の方の空が、夕陽で赤くなって来た。歩くのをやめて、腰を下ろし、

ひとときを楽しむことにした。

セトバルは、湾になっていて、前方の右方向、はるか向こうに塔のようなものが見える。

リスボンの方向、名前のある建物かもしれない。

やがて、夕陽の明るさが増し、色合いも変化してきた。沖ゆく船もあった。

作品になるような状況ではなかった。

カモメがたむろする海岸線は、すでに光が強く、逆光に近い。

ハレーションが強く、カメラを向けにくい。

撮るつもりもなく、ぼんやりと、ひとときを楽しんでいた。

カモメだろうか？ 群れて海辺近くにたむろしている。カモメの食事時間なのか。

何かを食べているのか、夕陽を楽しんでいるのか。

寄せる波、返す波、実にのどかな光景である。このイベリア半島の旅の期待が膨らむ。

見るでもなし、夢想するでもなし。頭は空っぽのような状態。

散策コースに間違いなし。つぎつぎと老若男女が、夕陽に向かって散策。

人も増えてきたような気配。ランニングをしている人もある。

鳥たちは、いつものことで慣れているのか驚かない。

そんなに珍しい光景ではないのかもしれない。私もあまり気にもとめなかった。  
最初は、記録程度に撮っておこうと考える程度で、  
作品になるような状況ではなかった。

瞬きという瞬間。

何となく、ぼんやりと鳥たちは目に入っていた。  
左から右、夕陽の方向に歩く人が多い。  
波打ち際をさけて、歩くコースが決まっているようである。  
カモメの中でも、落ち着かないカモメもいる。  
少々、人が通っても動揺もないカモメもいるようだ。リーダーはいるのか。

一人の裸足の少年が目に入った。棒切れを持ち、寄せる波、返す波と戯<sup>たわむ</sup>れながら  
夕陽の方向へやって来た。少年の進行方向には、鳥たちがいる。  
ふと、気になった。これでは、正面衝突である。直感か、本能なのか、カメラを引き寄せた。  
最初、さし足で、鳥たちに近づこうとするしぐさ。  
鳥たちの方が、一枚上手である。食事中であろうが、身の危険が最優先。  
実に上手く、少年との距離を保ちながら移動する。  
カモメと少年との駆け引きが何とも面白い。  
少年は、何かをしたかったわけでもなかったのではないか。  
戯れが面白かっただけではないか。最初は、そんな風に見えていた。  
数羽が距離感を保って小移動、まさに剣道の達人の間合い。  
実に見事に距離感を保つのである。  
少年も成り行きで、手にしている棒を振り上げた。  
カモメのリーダーがいるのかもしれない。  
小移動が大移動に、所場を変える判断をしたらしい。なんとも嬉しい光景になった。

人がいるとか、いないとかの問題でなく面白そう。  
本能的に、距離感や立つ位置を選んでいて。夕陽をまともに受けては、逆光である。  
作品にならない。オーケストラの指揮者のような感覚。  
配置も整い、それぞれの役割を果たしてくれるとありがたい。  
そんな意識が、潜在意識としてあったようだ。

主役、脇役、借景、構成に構図、光、色彩、そして、運。

どうにも思い通りにいかない被写体。

大自然を相手に、動態を作品にするのは難しい。

その瞬き、難しいから、簡単にいかないから面白いのである。

まだ暗くはない。光は充分ある。手持ちオーライである。

連写しないのが久楽流。機械のカメラが撮るのでなく、撮るのは、人間の心と感性。

やり直しもきかない。一期一会。

真実を写すのが写真であり、心を写す写真であってほしいとこだわる。

素敵なモチーフが出来て、初めて、和紙芸術「夢絵」創作のモチーフになる。

顔料が百年。寒漉き純楮和紙は、千年の耐久性、こだわる理由がそこにある。

後々の世の中まで、素敵と言われるのは、真実だけ。

デジタルは、伝えるという目的もあって、

得てして過剰演出になりかねない。時には、虚像になる。

虚に口をつけると、嘘になる。

本題に戻り、かたずをのんで見守った。写心道と言う思いがある。

自分の目という最高のレンズを駆使して観る。

我ながら驚くのは、運の良さとフットワーク。ラッキー、スマイルオンミー。

指揮者の思いとは別に、自然が味方してくれる。

子供の足が一本に見える瞬間、これもこだわりの一つ。

その傾きで、スピード感が判断できる。どのタイミングでシャッターを押すか。

スローモーションのように、イメージが浮かんだようになった。

何ともラッキーであり、不思議な感覚だった。

私の心をとらえたこの作品、今も、はっきり心に焼きついている。

時々の瞬間を、スローモーションのように語れるほど、印象が強い。

一期一会の瞬間、この旅は楽しいものになりそうな予感。

作品「カモメと少年」は、

この後も、ラッキーのキーワード、事実そうだった。

本の出版、久楽迎古作「地球4周ひとり行脚」

表紙にも使った。素人の本だったが、皆さんに助けられ、ラッキーにも助けられ、在庫は残すところ、わずか。何ともありがたい。

もちろん、和紙芸術「夢絵」にも創作して、アトリエに飾ってある。

作品展でも評判になった。誰に感謝し、お礼を言えばいいのか、

一期一会、この作品ができたことも嬉しいが、

こうして発表させて頂ける喜び、機会を頂戴した産経新聞様、

作品「カモメと少年」ありがとう。